



# TOMORROW FIELD 2025

あしたの畑 2025

2025 8.9(土) - 9.15(日)、11.10(月) - 11.24(日) 土・日・月・祝日のみ公開 11:00 - 17:00

会場 問人スタジオ、問人レジデンス、SEI TAIZA、宮のあしたの畑 主催 NPO法人TOMORROW、福祉特設法人日本芸術文化振興会、文化庁 協賛 国土交通省、国土交通省 地域 森村豊明会

August 9 - September 15, November 10 - 24, 2025 - Open only on Saturdays, Sundays, Mondays, and national holidays 11:00 - 17:00

Venues SEI TAIZA, TAIZA Residence, TAIZA Studio, Miya Organizer TOMORROW, Japan Arts Council, Agency for Cultural Affairs, Government of Japan 協賛 CULTURAL EXPO ED

Subsidy Morimura Houmeikai Foundation Reservation <https://tomorrow-jp.org/> 託原美里「あわい道」2025年 | Misato Ogihara "The Liminal Road" 2025

## 500年後の人々の誇りになる遺産を生み出す 集落構想プロジェクト「あしたの畑」

芸術文化活動を核とする非営利団体 NPO法人TOMORROW（理事長 徳田佳世 / 副理事長 徳山豊、西沢立衛 / 理事 中田英寿）が主催する「あしたの畑」は、アートと食を通して人が集まるきっかけと学ぶ場を生み出し、土地が持つ自然の財産に気付く機会を提供し、次世代に繋げていく集落構想プロジェクトです。

京都市内と京丹後市間人（たいご）を拠点に、その土地の材と営みを再評価し、集落の中で豊かに生きていくノウハウを育むエコシステムを構築、新しい価値を見つけ出すことを最重要視しています。

代表の徳田佳世は、地中美術館（2004年開館）、豊島美術館（2010年開館）と、瀬戸内海を日本における現代アートの巡礼地とする一連のプロジェクトに中心となって携わったのち、京都に移住。

京都市内の町家を改修した「世 | SEI KYOTO」（設計：西沢立衛）をつくり、建築家の橋詰隼弥とともに、料理人、職人、アーティストと協働でものづくりに取り組みます。

2020年から京丹後市間人にも拠点を構え、500年後の人々の誇りとなる遺産を生み出せるよう、日本に暮らすこと、世界が平和であるために文化芸術活動を通して貢献することの意義を思考し、アート・工芸・建築・食の分野から集落環境を提案する活動を行っています。

## ART SITES

あしたの畑は、文化芸術プログラムを通じて、アートが社会で循環し、また土地に根差す作品を創造することで、人が感動する心を耕せる集落となることを目指しています。

### 世 | SEI KYOTO (2016年)

建築家 西沢立衛が、築100年を超える京都の町家の伝統に向き合いながら職人たちとつくり上げた手仕事の結晶。NPO法人TOMORROWの京都市内の拠点兼住居。

所在地: 京都市内 (非公開) / イベント会期中のみ公開 Instagram [@sei\\_kyoto](https://www.instagram.com/sei_kyoto)



内藤礼展示 (2016年)

### 間人スタジオ (2021年~)

土地の工法、素材と現代の思考、技法で、今とこれからのサステナブルな居住空間を作り上げる実験的な家屋。木工職人 中川周士による「木の部屋」など、建築と工芸を結ぶ新たな試みを行っています。

所在地: 京丹後市丹後町間人2854 / イベント会期中のみ公開



中川周士「木の部屋」



杉本博司「あしたの畑」ロゴ

テレジータ・フェルナンデス「独白(間人)」

## 間人レジデンス (2025年)

自然素材を最大限に活かし、日々の暮らしと制作活動を重ねることができる居住空間。丹後の朱土で仕上げた空間や上世屋の和紙を組み合わせた「白い紙の部屋」、朱土から着想を得た浴室、間人の土を混ぜた紙を用いた「間人紙の部屋」など、4つの空間で構成。海を越えて伝わった文化や技術が育んだ丹後の歴史を想像し、静かな内省と創造の時間を提供します。

所在地：京丹後市丹後町間人3332-2 / イベント会期中のみ公開



## SEI TAIZA (2024年)

築60年の丹後ちりめん工場として使われていた建物を改築。織物の新たな可能性を探る間人初のアートギャラリーとして再活用しています。

所在地：京丹後市丹後町間人3329 / イベント会期中のみ公開



ケン・グン＝ミン「about me living from your last breath」(2024)

サムソン・ヤン「TWO TREES FOR KOTO」(2023)

## 宮のあしたの畑 / TOMORROW FIELD in Miya (2022年~23年)

リジェネラティブなアート、工芸、建築作品の創造の場となる常設作品「Field of Stars」のほか、建築家 西沢立衛による最小建築「納屋」、陶磁器作家 新里明士と加藤貴也による「あしたの畑窯」を展示。

所在地：京丹後市丹後町宮249



左下：西沢立衛建築設計事務所（監修）「納屋」

テレジータ・フェルナンデス・中川周士、他「Field of Stars」

## 宮ティーハウス (2025年~)

地域住民・学生と共に学ぶワークショップを行い、新しい“食とアートの場”を制作。リジェネラティブ・アーキテクトのアンナ・ヘリンガー、陶芸作家マーティン・ローチ、TOMORROWによる共同プロジェクトとして、地域の土を使った版築技法や野花・薬草の植栽など、環境を回復・再生するデザインを目指します。

所在地：京丹後市丹後町宮249（宮のあしたの畑）



「宮ティーハウス」模型 (2025)



京丹後と韓国 — 美術と食を通じて互いに学ぶ機会を創出

## 韓国「ONJIUM」との共同プロジェクト『SEA BRIDGES』

韓国の文化遺産研究所「ONJIUM（オンジウム）」とともに、美術と食を通じて互いに学ぶ機会を創出する共同プロジェクト『SEA BRIDGES』を2025年6月に始動しました。古代から海を越えて交流があった京丹後と韓国を舞台に、美術・食・工芸・建築を通じて文化や歴史を学び合い、その魅力と技を次世代へ継承することを目的としています。

### 2025年度プログラム：私たちの未来の食卓（SEA BRIDGES: Our Future Meal 2030）

共同企画の第一弾は、「私たちの未来の食卓（SEA BRIDGES: Our Future Meal 2030）」をテーマに、食と工芸に焦点を当てたイベントを京丹後とソウルで開催。食では、日本料理店「魚菜料理 縄屋」と韓国伝統料理レストラン「ONJIUM」が、両地域の食材と技法を融合させた季節の特別メニューを提供。工芸では、「Clothing Studio, ONJIUM」による韓国伝統織物「羅（ラ）」の衝立と、京都の唐紙作家「かみ添」、金沢木制作所、藤田雅装堂が朝鮮時代の「四君子牡丹文様」を唐紙に仕立てた屏風を展示します。

『SEA BRIDGES』 <https://tomorrow-jp.org/program/seabridges/>

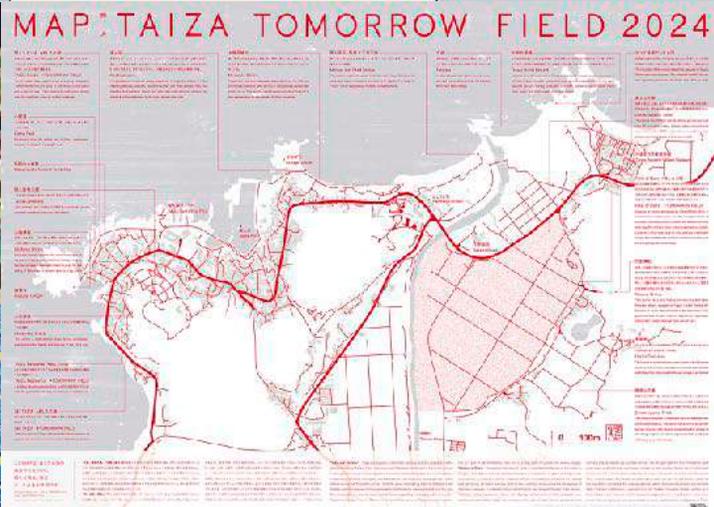
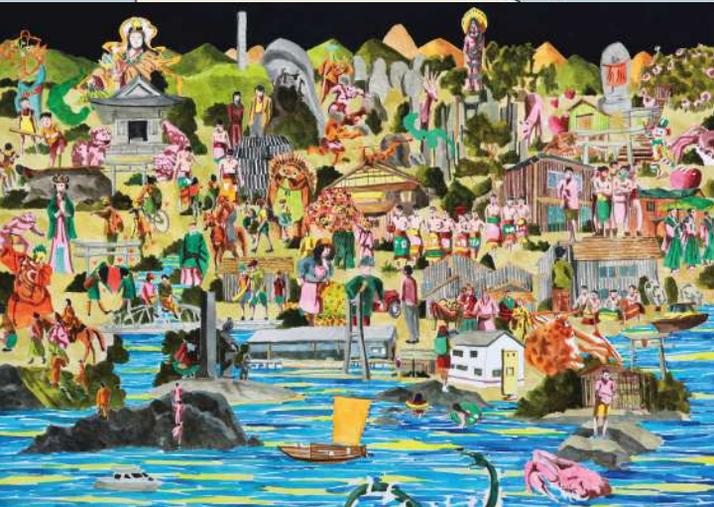


## アクセス

奈良に都が置かれる以前、丹後はひとつの巨大な王国であり、近隣諸国や住民とのダイナミックな文化交流によって、当時の日本文化の最先端を担っていました。

2025年現在、京都市を訪れる外国人観光客は右肩上がりが増えており、オーバーツーリズムが問題視される中、京都を頻繁に訪れる外国人のみならず、国内在住者にとっても京丹後の魅力を再発見することは重要だと考えています。

丹後は京都市内から車で約2時間。近隣の天橋立や伊根の舟屋、城崎温泉などは、いずれも車で1時間圏内にあり、京都市内に飽きたインバウンド需要に応え、中長期滞在するにはとても良いポテンシャルを持っています。



## プレスアーカイブ

- 2023.5.28 THE WORLD OF INTERIORS [“A BETTER TOMORROW”](#)
- 2023.9.9 designboom [“tomorrow's 'field of stars' installation ponders environmental changes in japanese village”](#)
- 2023.10.17 e-flux Agenda [“Field of Stars”](#)
- 2024.8.30 Sustainable Japan by The Japan Times [“Project focuses on harvesting ‘fields of the sea’”](#)
- 2024.9.3 APOLLO [“The Apollo 40 Under 40 Craft in focus: Shunya Hashizume”](#)
- 2024.11.9 VOGUE JAPAN Web [“京丹後市間人にて「あしたの畑 2024年秋期」特別展が開催”](#)
- 2025.3.1 新建築 2025年3月号
- 2025.4.1 VOGUE JAPAN 2025年5月号
- 2025.8.7 VOGUE JAPAN Web [“自然とアートが息づく集落構想「あしたの畑」、京都・京丹後で夏期限定公開へ”](#)



## 主な活動実績

- 2016年 卅 | SEI KYOTO 内藤礼 展示
- 2019年 SEI-kitchen
- 2021年 雅楽間人公演「心田を耕す」
- 2022年 食とアートの祭典「ECHO あしたの畑ー丹後・城崎」、写真家・畠山直哉 展覧会「Taiza, Tango」
- 2023年 食とアートの祭典「ECHO あしたの畑ー丹後・城崎」、サムソン・ヤン（作曲）× LEO（箏）
- 2024年 食とアートの集落構想「あしたの畑 2024秋期」、企画展「Remedy」  
 レクチャー「リジエネラティブ・アーキテクチャー：アンナ・ヘリンガー＋平田晃久」  
 cenci × 縄屋 コラボレーションランチ/ディナー
- 2025年 食とアートの集落構想「あしたの畑 2025」春期（3月）、夏期（8～9月）、秋期（11月）  
 ONJIUMとの共同プロジェクト『SEA BRIDGE』始動



「雅楽公演」主催:あしたの畑、2021年、2022年



畠山直哉「間人・丹後の風景」



SEI-kitchen vol.7 「サステナブル・ファッショと海のお菓子」

# NPO法人 TOMORROW / あしたの畑



ロゴデザイン: 杉本博司

NPO法人TOMORROWは、芸術文化活動を核とする非営利団体。

「感動すること」を最上位の価値として定め、芸術文化活動を通し、豊かな心を育み、平和な国際社会を築く一因となることを目的とします。

2020年より京都北部の京丹後市間人地区にて開始した活動「あしたの畑」は、国内外で活躍するアート（建築・工芸などの表現を含む）と食のプロフェッショナルたちが、分野を超え、都市部では得られない地域の立場から、未来に引き継ぎたい日本の美しい景色を文化芸術的アプローチによって創造していくことを目指します。

## NPO法人TOMORROW BOARD MEMBERS

理事長 徳田佳世  
副理事長 徳山豊、西沢立衛  
理事 中田英寿

アドバイザー委員会  
福武総一郎、ミウオン・クウォン、  
リシャール・ジェフロワ、マーカス・ハートマン、  
テレジータ・フェルナンデス、エミー・ユ

## あしたの畑 STAFF 2025

ディレクター	徳田佳世
プロジェクトマネージャー	橋詰隼弥
プロジェクトコーディネーター	岡本夏佳
プロジェクトスタッフ	若松晃平
印刷物デザイン	祖父江慎 (cozfish)
Website	田中義久、古庄果奈 (centre)
広報	中川奈保、吉澤朋

---

Website	<a href="https://tomorrow-jp.org/tomorrow/">https://tomorrow-jp.org/tomorrow/</a>
Online store	<a href="https://tomorrowfield.stores.jp/">https://tomorrowfield.stores.jp/</a>
Instagram	<a href="https://www.instagram.com/tomorrow_field">@tomorrow_field</a>
Youtube	<a href="https://www.youtube.com/@tomorrowfield">https://www.youtube.com/@tomorrowfield</a>
Facebook	<a href="https://www.facebook.com/tomorrowfield/">https://www.facebook.com/tomorrowfield/</a>

取材・掲載に関するお問合せ [press@tomorrow-jp.org](mailto:press@tomorrow-jp.org)





## 間人への道

徳田 佳世

担当した豊島美術館が完成した2010年10月、開館2週間後に京都に引っ越してきてから、“工芸”に携わる人々との出会いと、彼らが情熱を捧げている技と心を理解したいという思いから、陶芸について勉強することから始めた。有田、伊万里、唐津、萩、砥部、益子と巡り始めると、やがてその原点となる琉球や李朝の歴史が気になり出し、旅と本や映像での勉強を重ねること数年。2016年に発行された「ゲンロン3号」で朝鮮半島の38度線、DMZでのアートプロジェクトを知り、ソウルから電車、そこからバスで白骨部隊の基地を訪ねた。目の前に広がるのは、果てしない広野。遠くの山頂に北朝鮮の基地が見える。近くには、鉄柵が二つの線を東西に描いている。

南側の木々も大地の色も北のそれと同じに見える。同じ民族だった人々がある日突然”別々に”なった心情を想像してみるだけで、胸が締め付けられる思いがした。私は政治にも経済にも疎い。情熱を注いできたのは”アート”だ。人が祈りをこめ、手で自然の素材から自然に捧げる平和や安寧への想い。できることから始めよう。同じ年の冬、韓国のアーティスト、ス・ドホに「アーティストが魂を削って紡ぎ出すアートが作られる状況を生み出すのが君の役割のように思う」という言葉に触発され、建築家の西沢立衛さん、教育者の徳山豊さん、実業家中田英寿さん、そして恩人である福武總一郎さんの理解を得て、NPO法人設立の手続きをとり、認可された頃と時を同じくして、“あしたの畑”と名づけた集落構想の種が蒔かれた。アートの精神の伝承は、テキストがあるわけではない。人とのめぐり合いと経験、現場をつくることが、20年先、50年先にも大切にされる、愛されるものを作る責任であり、使命だと感じていた。日本の風土―自然と人との歴史と文化―が世界からリスペクトされる風景を、これからを担う世代の若者たちに委ねながらともに作りたい、それには歴史をもつ土地で、縄文時代を思い起こさせる豊かな自然と人の暮らしの原風景が大切だ。



京都から奈良へ、和歌山へ、三重へ、滋賀へと旅をし、理想の土地を探し求めて、2020年の夏、京都の北、大成古墳群を訪れた。剥き出しの石室、4世紀ぐらいなのだろうか？ 5世紀なのだろうか？ 海に向けてあらあらしく曝け出され組み合わせられた石室は、海に向けて弔い、死後の世界を安らかにと願う人の気持ちが伝わってくるような景色だった。

かつて、人類が宇宙に暮らすこともやがてあり得ると漠然と捉えていた時に、火星に暮らすとどうなるか？ ということについて調べ、仲間たちとともに勉強会を続けていた。しかし、火星の上の小さく閉ざされた空間の中で地上の暑さと寒さから逃れ、小さな窓から外を眺める暮らしは、限られた人のみに許され、地球人全員が対象ではなさそうな印象を持った。宇宙での暮らしの居住空間や集落のかたち、そこでのアートとは？ と想像するのはそこで休止して、地球で暮らし続けるとはどのようなことか？ 空や海や山という、子どもたちが安心して暮らせる地球の美しさを続けていくために何ができるのだろうか？ と考え始めた先に、集落構想「あしたの畑」が生まれた。アートが社会で循環するには、人が感動する心を耕せる、集落がある。

空と海がその祈りを受け入れるかのように、波が岬に押しよせては引く。ここ一間人（たいざ）と呼ばれる漁村に、アートの大切なものはすべてここにあり、ここから生まれると、ともに訪れた20代の橋詰隼弥と直感した。